

第3節 金沢城惣構の構造と変容

1. 金沢城「惣構」の呼称をめぐる

金沢城惣構は内外二重に巡り、慶長4年(1599)に2代藩主前田利長が高山右近に命じて総延長約2.9kmの内惣構を、慶長15年(1610)に3代藩主利常が篠原一孝に総延長約4.2kmの外惣構を造らせたと言われている¹。惣構は二時期の産物であり、城下町の発展過程を示す稀少な遺構である。現在、総称として「惣構堀」と呼ばれているが、その変遷を確認し用語としての妥当性を検討したい。

我が国における「惣構」の初見は、文明12年(1480)5月16日付東寺百合文書に「東惣構」が見え、東寺境内を囲む遮断施設とされる。16世紀には、城郭の外縁を指す用語として「外城」や「外構」が多用され、天正11～12年頃を境に「惣構」が一般化すると指摘されている²。

金沢の「惣構」に関する初見は、天正12年(1584)の惟住越前守(丹羽長秀)宛て羽柴秀吉書状写に「金沢之惣構」³が登場する。この天正期惣構と、後述する慶長期惣構との関係は不明であるが、金沢城新丸・金谷出丸などの外曲輪を指すとの説⁴がある。慶長6年(1601)の前田利長発給の知行宛状に「惣構侍屋敷」の名称が見える。この書状は、慶長4年に造営された内惣構の2年後にあたり、慶長期惣構に関する最古の記述となる⁵。次いで、慶長16年(1611)の前田利光(利常)から惣屋敷奉行宛の「金沢屋敷之法度」には、全九条中に惣構に関するものが六条見える。その内容は、高岡から金沢へ移ってきた藩士下屋敷を「惣構之外」に与えること、「惣構侍屋敷」になる場所に存在する寺庵などの建物を移転することなど、惣構を基準ラインとした都市整備が進められており⁶、また「惣構土居之内道」として二間確保すること、「土居之土を取堀を埋候事」、「惣構之土居の竹」を勝手に伐採することを禁じるなど、惣構の保全に注意が払われている⁷。同様に、慶安2年(1649)の定書にも、「惣構」と「惣構之土居」に続き、「堀」へ塵芥を捨てることや堀の土砂を無断採取することが禁止されている⁸。以後も、藩から類似した文書が発給されている⁹。禁止の対象は武家だけでなく、「惣構竹木並竹子伐取候義御停止之事」と町方の本町・地子町肝煎中へも通達されている¹⁰。寛文7年(1666)の「金沢図」や延宝年間の「金沢城下図」では、図中に「惣構堀」の用語が見えるが、後述するように堀を指すものと思われる。文政7年(1824)「金沢道橋帳」写には、「惣構」、「惣構土居」、「御堀」が、また、惣構を管理する職として、「道橋并惣構奉行」¹¹、「惣構橋番人」¹²の名称が見える。明治に入り、藩は近江町に隣接した「惣構御土居」を取り崩している¹³。このように、藩は一貫して総称として「惣構」を、その部分名称とし

て「土居」と「堀」を呼び分けている¹⁴。

惣構への敬称は、文化8年(1811)の『金沢町絵図』では上近江町の土居を「御惣構土居」とし、文政3年(1820)の用水に関する廻状で、藩重臣達が堀を「惣構御堀」と呼んでおり、惣構に敬称を付けるようになっている。

惣構以外の呼称は、貞享2年(1685)に大乘寺と妙応寺が藩へ提出した「由来書上」には、「惣堀」普請のために寺を移転したと述べている¹⁵。享保19年(1734)に成立した『加陽金府武士町細見図』では、前文中に「惣構ノ堀ヲ穿土居ヲ築カレ今ノ内惣構是也」と見え、「内惣構」の呼称が登場する¹⁶のに対し、図中では「惣川」¹⁷、「惣川堀」が書き込まれている。用語が不統一の理由としては、前文が有沢の語句と思われるのに対し、図は別人又は後世の追記で異なる可能性も考えられる。『政隣記』¹⁸寛政11年(1799)の金沢強震では、「惣構川縁之家共多分惣川方傾」とあり、「惣構」と「惣川」の用語が同一文中で使用されている。これを引用した『加賀藩史料10』では、上段で「惣川は惣構」と注釈しているが、惣構川縁の建物が惣川へ崩れていることから、惣川は惣構堀の意味と考えるべきである。また、江戸後期に書かれた『越登賀三州志』と『亀の尾記』には、惣構に「塹」(ほり)の文字が使用されている¹⁹。

土居の取り崩しと堀の埋め戻しは、近世から徐々に進行していたが、近代に入り一気に加速する。明治2年に藩は「惣構」が不要であるため「御土居」を取り除いている²⁰。同じく明治8年(1875)、尾山神社神門造営の際に内惣構土居を崩して惣構堀を埋めており²¹、ここに西内惣構土居は概ね消失した。この状況に至る所で進んだ結果、土居が失われた景観が日常化し、「惣構堀」の呼称が一般化してゆく²²。

以上、近世は藩が惣構の保全を図っており、明治まで総称として「(御)惣構」を²³、部分名称として「土居」と「堀」を使用した。これに対し、「惣堀」と「惣川」は別称の可能性もあるが、「惣構堀」の可能性が高い。明治に入り、藩が土居を崩すなどその消失が進み、「惣構堀」の呼称が一般化する。問題は、その呼称が堀を指す場合は良いが、土居跡も含む範囲を指すことは混乱を招くので、総称としては「惣構」が妥当である。

2. 惣構の類例と構造

自然地形は、惣構の造営プラン・規模に大きな影響を及ぼす。ここでは、「正保城絵図」を中心に惣構のプラン・規模を見て見る。正保城絵図は、正保元年(1644)に3代将軍家光が諸藩に命じて提出させた城下町絵図で、城郭、石垣・土居の高さ、堀の規模などの軍事情報が記されていることで著名である。幕府からは、「惣構之堀そこここにて、ひろさふかさ書付け申すべき由之事」²⁴と、特に惣構に関

しては堀の広さと深さが求められたため、その記載が詳細となり、逆に土居の情報を簡略化したものも存在する。最初に、「惣構」・「惣堀」などと書かれた代表的な城絵図を取り上げることとする²⁵。

(1) 平地の惣構

① 豊後・府内城と「惣構」

慶長2年(1597)、12万石で福原直高が入封し、後に竹中重隆が慶長7年から城下町を整備する²⁶。別府湾を背に、本丸・二ノ丸・三の丸・惣構と梯郭式の縄張りである。外郭惣構の外に小道が赤線で描かれており、「惣構より外の小道」と記入されている。また、「惣構の堀より西(南)方の山まで」の距離も記入されることから、外郭外縁の「土井」と「堀」が惣構と呼ばれている。土居は、薄い緑色で彩色され、上には松のような樹木が描かれている。規模は、西辺が幅10間～10間半に水面からの高さ5間の土居が、直線的に長さ302間伸びる。南辺は、幅・高さが同規模で長さは710間ある。東辺は、幅8間半に水面からの高さが4間で、長さは107間と短い。土井は東辺が西・南辺より小規模である。堀は水堀で濃い青色で彩色されている。規模は、西辺北端が幅22間と深さ8尺5寸に対し、西辺中央以南は幅10間～15間に深さ7尺を測る。南辺は、幅20間に深さ6尺を、東辺は幅25間に深さ5～6尺を測る。堀幅は、東辺→南辺→西辺の順に広がるが、逆に深さは浅くなる。

惣構は惣郭型で、堀幅が10～25間(約18～45m)と広く、深さは5尺～1間2尺5寸(約1.5～2.55m)と浅い。土井は総延長約2kmを測り、幅8間半～10間半(約15.3～18.9m)に高4～5間(約7.2～9m)と大きく、堀と共に平地での防御性を高めている。

② 岡山城と「惣堀」

天正元年(1573)に宇喜多直家が築城し、秀家(石高約57万石)の代に大改造が行われている。関が原の戦いの後、小早川氏、池田氏にかわる。城は蛇行する旭川を背に、殿守丸、本丸、二ノ丸が続き、南には二ノ丸堀で画された武家屋敷が配置される。その外には山陽道と町屋が沿うように走り、外側に水堀が巡り、「惣堀」、「西堀」、「惣構堀」と呼ばれている²⁷。土居は、灰色で彩色され文字の注記はない。規模は北辺の長さのみ記入されており、3町3間を測る。高さは全て1間半と低い。一方、堀の規模は、北辺が幅13間に深さ1間を測る。西辺は長さ15町35間で、幅は北側が16間に対し南側が18間、深さは1間を測る。南辺は長さ2町42間で幅14間に深さ1間半を測る。出入口は5ヶ所存在し、いずれも升形構造となっている。

岡山城惣構は直線的な縄張りで、堀は幅13～18間(約23.4～32.4m)・深さ1～1間半(約1.8～2.7m)、総延長約2.3kmになる。堀幅に対し、土居高は1間半と低く均一である。

③ 桑名城と「惣堀」

関が原の合戦の後、本多忠勝が10万石で入封し、元和3年(1617)に松平氏が入る。城下町は、寛永12年(1635)頃に完成した。堀は幅18間を測るが、慶安3年(1650)の洪水のため「惣堀」が土砂に埋まる。高さ1間5尺の「土手」上には、高さ5尺の板塀が北の橋詰門まで長さ401間にわたり設けられていた。

惣堀は惣郭型で、堀幅18間(約32.4m)で、土手は板塀を合わせた高さが2間4尺(約4.8m)となる。

④ 長岡城と「惣かわ」

慶長10年(1605)に堀直奇が築城を開始し、転封の後、元和2年(1616)に再度城主となる。しかし、再度転封し、牧野氏が城主となる。城は、信濃川が形成する沼や深田が広がるデルタ地帯に形成されており、川を堀として利用している。内郭外縁に設けられた諸門の内、「惣かわ門」が4ヶ所確認でき、方形に巡る堀が「惣川」と呼ばれた可能性が高い。堀は水堀で、北辺の長さが370間に西辺が380間で、幅7間・深さ1丈に、「土井」は高さ8尺、幅5間を測る。北・東辺は、川が幅3間・深さ3～4尺に、土井が高さ6尺に幅3間と小規模である。これに対し、外郭西側の古川(幅35間・深さ5尺)沿いの土井は、高さ2.5間～3間に幅7間～9間と惣川土井の倍近い規模である。これは、信濃川の水害に対する堤防の意味もあろう。南方の土居は、西側が高さ3間に幅9間、東側が高さ6尺に幅3間と開きがある。虎口は南方が遮蔽しない升形状であるのに対し、北方城下の2ヶ所は平虎口である。

惣川は、堀幅7間(約12.6m)・深さ1丈(約3m)に土井高1間2尺(約2.4m)と平地では大型とは言えない。一方、惣構土井は東西で異なり、幅は小型が3～5間・高さ1間～1間2尺、大型が7～9間・高さ2.5間～3間である。

(2) 丘陵地の惣構

① 盛岡城

天正18年(1590)に南部信直が10万石を安堵され、慶長3年(1598年)から築城を開始し、寛永10年(1633)に完成した。城中心部は平山城で、本丸から三の丸まで升形虎口である。惣構は、「土手」と「堀」からなり、町地の出入口は食違虎口である。土手の高さは、東側が2間半、北側が2間5尺、西側が3間、南側は3間半と高くなり、幅は記載されない。南・西側が高いのは、北上川の洪水対策もあろう。堀は空堀で、東側が幅5間～5間半、深さ1間1尺～2尺、北側が幅6間に深さ1間5寸、西側が幅6間に深さ1間を測る。

惣構は直線的でなく、堀幅が5～6間(約9～10.8m)と狭いのに対し、土手高は2間半～3間半(約4.5～6.3m)と、堀幅に比べやや高い。

② 小田原城

後北条氏は、天正 17～18 年（1589～90）に豊臣秀吉に対抗するため、延長 9km に及ぶ惣構を造営した。惣構は現在までに 23 地点で調査され、障子堀が確認されている。丘陵部惣構は空堀であり、地形に応じて堀の幅や深さを変えている。発掘調査した事例では、伝肇寺西第 I 地点が、堀幅約 16.5m、深さ約 10m と大規模で、上二重外張第 I 地点が堀幅約 5.2m、深さ約 4.1m と小規模な堀が検出されている²⁸。正保城絵図では、惣構の東海道口は喰違虎口である。

丘陵地惣構は空堀を基本とし、場所により規模に開きが見られ、平地の惣構堀より幅が狭く、深さは逆に深い傾向が見られる。

③ 金沢城

等高線と河岸段丘を利用して巡らせているため、プランは不正形な楕円形状を呈する。金沢城の正保城絵図は残存せず、江戸前期の惣構の正確な規模は不明である。西外惣構跡武蔵町地点の発掘調査により、当初推定堀幅 14 m が 19 世紀初頭には 1/3 以下に縮小していることが判明している。想定される土居幅は約 6 m であり、堀に対して小規模な土居である。明治 2 年の「御土居取除方に付伺書」によると、内惣構の十間町橋番人後より下近江町三番町までの間の土居約 74 間（約 133.2 m）が、幅 3 間に高さ 1 間 3 尺（約 2.7 m）の規模で残存しており、武蔵町地点と類似した規模である。大規模な土居の事例としては、広坂遺跡（1 丁目）で西外惣構土居跡が発掘調査され、推定される土居幅は最大約 18 m であり、下流宮内橋方向に幅 15 m と狭まる。堀は現況で幅約 3～6 m と宮内橋方向へ広まっており、土居の規模と反比例している。文政 7 年の『道橋帳』では、上流の昼屋橋の長さが 4 間、下流の宮内橋が 5 間と、現況堀幅より大きい。隣接する内道は、側溝を除く幅員が 4.5 m を測る。

惣構は、場所によりその規模が異なり、確認した土居は大型で幅約 18 m、小型で幅約 5～6 m、堀は前者が現況約 3～6 m、後者が約 14 m と、土居と堀の規模は反比例している。

(3) 金沢城惣構の虎口

金沢城惣構を描く現存最古の城下図は、寛文 7 年（1666）の金沢図である。寛文図は、内惣構が造営されてから 67 年、外惣構が造営されてから 56 年経過しており、惣構造営当初の姿をどの程度留めているのか、課題を残している。寛文図の惣構虎口は、内惣構で計 12 ケ所（東内 5 ケ所、西内 7 ケ所）、外惣構が計 14 ケ所（東外 4 ケ所、西外 10 ケ所）で、虎口は計 26 ケ所となる。この数は、時代は下るが文化 8 年（1811）の『金沢惣構絵図』²⁹と変わらない（第 1 図参照）。内惣構の虎口は、全て平虎口であるのに対し、外惣構では、西外の昼屋橋口と村井

家前が喰違虎口、升形橋口が外升形虎口で、他は平虎口である。東外は後の兼六園山崎山付近が喰違虎口で、他は平虎口である。虎口形状に大きな改変がないとすると、内惣構では平虎口が、外惣構では平虎口の他に喰違虎口 3 ケ所と升形 1 ケ所が存在する。升形は、城下から金沢の外港である宮腰港へ通じる宮腰往還の出入口に位置する重要な虎口である。但し、平・喰違虎口に対し、升形虎口は形式的に後出のため、宮腰往還が元和年間に 3 代利常により直線化された際に、改変された可能性もある。また、香林坊橋と枯木橋はその重要性から、当初から平虎口であったのか疑問が残る³⁰。

以上、「正保城絵図」は、幕府が惣構に関しては堀を重視したため、その情報が詳細に記入されている。寛文金沢図に「惣構堀」の名称を堀に記すのは、正保図の名残であろう。「惣堀」「惣かわ」の名称を残すものも見られるが、それがどの範囲を指すのかは、今後十分な検証が必要である。虎口は、内惣構が平虎口、外惣構が升形を除き喰違虎口と平虎口からなり、慶長期惣構の好例である。

3. 金沢城惣構の変容

文政 8 年（1825）に、穴生の後藤彦三郎が書き著した『文禄年中以来等之旧記』には、内惣構を「惣構堀」と呼び、外惣構を「今之惣構」と呼んでいる³¹。この呼び分けは、内惣構が堀だけの状態であったのだろうか。惣構の変容過程を検証してみたい。

惣構は、成立当初は軍事的緊張を背景に造営され、大坂冬・夏の陣における豊臣氏の滅亡後、しだいにその存在意義を変質させていく。元和～寛永期における城下拡張・再編に際し、新たな惣構の造営はなされず、既存惣構の維持管理に重点が移っている。藩は、法令により惣構の保全を図る一方、惣構虎口などに橋番人を置き橋の管理を担わせている。

寛文 7 年図で、惣構虎口の土居を改変し惣構橋番人の家地としているのは、西外惣構の升形橋口と今枝家前の橋口、東内惣構の九人橋口の計 3 ケ所である。これに対し、145 年経過した文化 8 年の『金沢惣構絵図』では、早くから宅地化された升形橋口は、町家が土居の一部を削るのみならず、道路部分を除く升形空間に町家が建ち、他のどの虎口でも惣構土居の両側か片側を削り、橋番人の家が建っている³²。また、北国街道が通る西外惣構の香林坊橋口と東内惣構の枯木橋口は、虎口に木戸が設けられているため、土居を避けて橋番人の建物が建てられている。藩主が参勤で通る重要な虎口では、土居を改変して町家を建てることを認めなかったのであろう。ところが、城の南に当たる外惣構石引口では、宝暦 9 年（1759）の「金沢大火消失域図」まで見られた城に向って左側の土居が、寛政 6 年（1794）に写された「明倫堂・講武館等之図」³³では堀を残して土

居が消失しており、寛政4年の藩校建設に伴い取り崩した可能性が高い。もともと延宝図では、本多安房家と横山左衛門家屋敷に惣構が描かれておらず、新たな惣構土居の消失は防衛線の空白地帯を拡大したこととなる³⁴。更に、文化8年(1811)の『金沢町絵図』³⁵や天保6年(1835)に作成した『金沢城下絵図』では、内惣構土居の減少が著しい³⁶。これに対して、外惣構土居は一部を除き保全・維持がなされており、惣構土居は、江戸後期に内と外では異なる景観が生じている。

一方、惣構堀は前述したように、西外惣構武蔵町地点の発掘調査により、当初推定幅約14mが17世紀末～18世紀初頭には約11mに、19世紀初頭には当初の1/3以下に堀幅が大幅に縮小していることが判明しており、東内惣構枯木橋詰地点の発掘でも同様に縮小している。堀は幅を段階的に縮小しており、武蔵町地点では特に19世紀の変化が大きい。

明治2年に藩は「惣構」が「御要害ニ茂相成申間敷」、「御不益之義」であるため、内「惣構御土居」を取り除いている³⁷。更に、明治8年(1875)、尾山神社神門造営の際に内惣構土居を崩して惣構堀を埋めており³⁸、内惣構土居は大きく変容・消失した。

全絵図を検証したわけではないが、彦三郎が内惣構を「惣構堀」と呼称するほど、内惣構土居の消失が進行していたのであろう。

4. 総括

金沢城惣構の特質を要約すると以下の通りである。第一に、範囲の拡張を行ったため、内・外の異なる惣構により、都市の発展過程を知ることができる。二重の惣構は、慶長期における軍事的に守るべき城下町の範囲をそれぞれ示している。

第二に、惣構の構造は、傾斜地と河岸段丘を利用したために土居と堀は変化に富み、慶長期平山城における惣構の好例である。当初、堀は主に空堀で、平地の惣構堀のような大規模なものではない。土居は、堀幅の大きな所では低く、堀幅の小さい所では高いものが予想される。虎口は、内惣構が平虎口で、新しい外惣構が平虎口と食違虎口で構成され、宮腰往還口のみ外升形である。

第三に、元和から寛永期にかけて城下町の拡張・再編が行われたが、拡張した城下町を囲む新たな惣構は造営されず、惣構は軍事的な性格を弱め都市整備の基準線の役割を担った。藩は、17世紀代に惣構の土居と堀を守るために幾度か法令を出しており、惣構虎口の増加は抑制され、維持・管理に重点が移っている。また、虎口橋詰に惣構橋番人を置いた。

第四に、惣構の変容は、内惣構土居の消失と内外惣構堀の段階的な幅員縮小が、江戸後期に顕在化した。このことは、江戸前期に出された藩の法令と合致せず、どこかの時期で藩が内惣構土居の消失と内

外堀の幅員縮小を認めたと考えざるを得ない。惣構に対する変更は、文政6年に町地の過密化と拡大に伴い新たに148町が誕生しており、それを背景にするとと思われる。但し、依然として外惣構の土居が保全されていることから、外惣構を惣構として保全する政策がとられたものと推測される。後藤彦三郎が、内惣構を「惣構堀」、外惣構を「今之惣構」と評しており、文政期惣構の状況を端的に物語っている。

第五に、藩は最後まで総称として「惣構」を使用し、江戸後期には敬称を冠していた。明治には残っていた内惣構土居を藩自らが要害にもならず不益であるとの理由で取り崩し、堀は最終的に排水機能を満たす程度となった。外惣構も同様の運命を辿ったと予想され、以降「惣構堀」と呼ばれる。

(注)

- 1 内惣構は「前田家雑録」と「桑華字苑」を出典とし、前者は「金沢惣構」、後者は「惣構」と表記する。外惣構は加賀藩士の富田景周著の『越登賀三州志』などを出典とし、「外塹」と表記されている。いずれも江戸後期に編纂された史料であり、しかも、富田が当時依拠した史料は信頼性に欠けることを自ら断っている。
- 2 福島克彦 2002「第三章「惣構」の展開と御土居」『【もの】からみる日本史 都市』
- 3 注2文献に同じ。
- 4 木越隆三 2006「金沢城下 内惣構の築造時期について」『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』
- 5 注4文献に同じ。
- 6 宇佐美孝 2004「惣構堀から見た金沢城下」『市史編さん かなざわ』第12号
- 7 この惣構が内外惣構を対象とするのか、外惣構だけを指すのか不明である。但し、惣構の外に下屋敷を与えていることから、後者の可能性もある。
- 8 「国初遺文」『加賀藩史料』3。惣構の管理は、御普請会所に属する道橋方が小者・足輕を使って管理している。「第二節 城下町の空間」『金沢市史』
- 9 万治2年11月25日付の定書。『加賀藩史料』3
- 10 万治3年7月10日付の定書。『加賀藩史料』3
- 11 森田文庫「国事雑抄」。延宝8年(1680)十一月「道橋并惣構奉行定役願」によると金沢町奉行の里見七左衛門と岡田十右衛門の名前で本多安房などへ出されている。
- 12 『文化8年 金沢惣構絵図』玉川図書館所蔵
- 13 前田育徳会尊敬閣文庫「恭敏公日記一」『金沢市史』
- 14 「万治以前御定書」『金沢市史 資料編6 近世四』
- 15 『加越能寺社由来』。なお『三壺聞書』の「金澤町立替り道橋等附替る事」に、「元和二年の頃(中略)、下口惣構の内の寺町等は、浅野川山の際に

- 移さる。」とあり、惣構内に残った寺院を泉野と卯辰山へ移転させている。移転は惣構造営のみならず、慶長16年の「金沢屋敷之法度」による「惣構屋敷」の建設に伴う可能性もある。また、注2によれば、我が国における「惣堀」の初見は、延元元年（1336）2月5日付『鈴鹿家記』の「聖護院村惣堀」であり、呼称そのものは中世以来のものである。
- 16 「享保十九年 有沢武貞編 加陽金府武士町細見図」（玉川図書館所蔵）。玉川図書館蔵品は、享保19年に有沢が編纂したものを天明8年（1788）に長連屋が写し、更に昭和9年に写したもの。『金沢市史 資料編18 絵図・地図』。
- 17 本来「惣川（河）」は河川を利用した惣構を意味する用語と思われるが、ここでは明らかに人工の堀である「惣構堀」を指している。富山城では、総曲輪を「そうがわ」と呼んでおり、「惣川（河）」に通じる。
- 18 津田政隣は、700石取の大小将組藩士。文化10年（1813）没。
- 19 柴野美啓『亀の尾記』。本の成立は不明であるが、柴野は弘化4年（1847）に死亡している。
- 20 注12文献に同じ。十間町橋から世界橋（近江町橋）までと、世界橋から下近江町三番町までの土居。
- 21 森田柿園『金沢古蹟志 上巻』
- 22 明治に書かれた『金澤古蹟志』中の「惣構堀普請来由」の文中には、引用した出典により様々な用語が使用されているが、著者の森田自身は見出しから「惣構堀」と呼んだと考えられる。昭和5年の『加賀藩史料』で日置は「塹濠」、「惣構」の用語を使用している。戦後に入り、田中は総称として「惣構堀」を使用している。田中喜男1966『城下町金沢』。総称としての「惣構堀」は、近代以降の産物と思われる。
- 23 注2文献に同じ。京都の御土居を築造する際に、公家達は主に「堤」の呼称を使用しているのに対し、豊臣政権の武将である浅野長吉は「洛中惣構」と呼んでいる。武家が「惣構」と呼ぶ場合が多い。
- 24 「多久家有之候御書類十五」写。千田嘉博2001別冊歴史読本76『図説 正保城絵図』新人物往来社
- 25 注23文献と国立公文書館デジタルギャラリー「正保城絵図」を参照している。
- 26 矢守一彦1972『城下町』。よみがえる日本の城20『小倉城・府内城』学習研究社
- 27 図には京橋詰と二ノ丸堀から「惣堀」までの道路距離が3ヶ所で、「惣構堀」から南への道路距離が1ヶ所で記載されている。両者は連続する同一の堀であり、「惣堀」は「惣構堀」の略称の可能性が高い。
- 28 小田原市教育委員会2001『小田原城惣構』、2008年シンポジウム『中世小田原城と石垣山一夜城そして近世小田原城へ』。
- 29 玉川図書館蔵『文化八年金沢惣構絵図』東外惣構は、橋場町近くで途切れている。本来は、浅野川大橋を渡り、枯木橋に至るまでに虎口が存在したはずである。
- 30 田中は、升形が犀川口、香林坊橋詰、宮腰口の安江町橋詰（升形橋）の三ヶ所に置かれたとするが、少なくとも寛文図では確認できない。『城下町金沢』1966
- 31 喜内敏1976日本海文化叢書第三巻『金沢城郭史料—加賀藩穴生方後藤家文書—』。後藤彦三郎は100石取で御歩並の石積み職人。文政11年（1828）没。
- 32 西外の図書橋・塩屋土橋・豊屋橋・東寺末橋等と、西内の近江町橋・十間町橋・西町橋・新町橋・袋町橋等と、東外の下材木町橋・備中橋等と、東内の稲荷橋・蔵人橋は両脇。西外の右衛門橋・宮内橋・土橋等と、西内の不明御門橋等と、東外の剣崎ヶ辻橋等と、東内の九人橋は片側に橋番人の家が存在する。注11文献による。
- 33 北國新聞社2002『ふるさと石川歴史館』294頁
- 34 外惣構はここのみ土居も堀も描かれておらず、防衛線の空白地帯となっている。本多家上屋敷建設の際に、惣構を取り崩している可能性が高い。
- 35 金沢市立玉川図書館1998『金沢町絵図』
- 36 金沢市1999『金沢市史 資料編18 絵図・地図』。石川県歴史博物館蔵の『金沢城下図』は、遠藤高璟が『金沢十九枚絵図』を作成するに当たり、文政5年（1822）に町奉行所が命じて作成した図に、町名・橋名・坂名を記入して文政13年（1830）銘と自署を記したのち、更に加筆し天保6年（1835）に完成した。図の主な内容は、本図の文政5年頃の状況を反映するものと思われる。西内惣構では、①文化8年の『金沢町絵図』や『金沢惣構絵図』と比較して、以下の主な場所で変化が認められる。十間町～横堤町間の通りに面する両側の土居・堀が町家となっている。②下近江町～上安江町間の通りに面する土居が町家となっている。③二番町・袋町間の土居が消失して町家となっている。東内惣構では、①新町・橋場町間の土居が消失し町家となっている。②下今町・大鋸町間の土居が消失し町家となっている。以上、内惣構は武家地でも土居の消失が認められるが、特に町地での減少が顕著である。
- 37 注12文献に同じ。十間町橋番人後から世界橋（下近江町～青草町間の往来橋で別名接待橋）まで約34間と、世界橋から下近江町三番町まで約40間の土居。
- 38 森田柿園『金沢古蹟志 上巻』

第9表 惣構に関する用語表

	年代	惣構に関する用語	出典	
1	天正 12 年 (1584)	金沢之惣構	羽柴秀吉書状写	加越能古文叢
2	慶長 04 年 (1599)	金沢惣構	前田家雜録	加賀藩史料
3	慶長 06 年 (1601)	惣構屋敷	前田利長知行宛状	寿美田家文書
4	慶長 15 年 (1610)	惣構	桑華字苑	加賀藩史料
5	慶長 16 年 (1611)	惣構・惣構侍屋敷・惣構(之)土居・土居・堀	万治以前御定書	加賀藩史料
6	慶安 02 年 (1649)	惣構・惣構之土居・堀	国初遺文	加賀藩史料
7	承応 04 年 (1655)	惣構	国事雜抄	森田文庫
8	万治 02 年 (1659)	惣構	御定書	加賀藩史料
9	万治 03 年 (1660)	惣構	古今定書	加賀藩史料
10	寛文 07 年 (1667)	惣構堀	金沢図	石川県立図書館
11	延宝 08 年 (1680)	惣構御奉行	国事雜抄	森田文庫
12	延宝年間	惣構堀	金沢城下図	石川県立図書館
13	貞享 02 年 (1685)	惣堀	卯辰妙応寺由来書上	加越能寺社由来
		惣堀	大乘寺由来書上	加越能寺社由来
14	元禄頃	惣構	三壺問書	
15	享保 19 年 (1734)	(前文) 惣構ノ堀・土居・内惣構・惣構 (図中) 惣川・惣川ホリ・惣川堀	加陽金府武士町細見図	玉川図書館蔵
16	元文 04 年 (1739)	御惣構	加州郡方旧記	加越能文庫
17	寛政 11 年 (1799)	惣構・惣川	政隣記	加賀藩史料
18	寛政 13 年 (1801)	慶長十五年・(中略)・外塹	越登賀三州志	
19	文化 08 年 (1811)	惣構・御惣構土居・惣構橋番人	金沢惣構絵図	加越能文庫
20	文政 03 年 (1820)	惣構御堀	御国法御用留帳	瑞泉寺文書
21	文政 07 年 (1824)	惣構・惣構土居・土居・御堀	金沢道橋帳写	加越能文庫
22	文政 08 年 (1825)	慶長四年・(中略)・惣構堀 慶長十六年・(中略)・惣構	文禄年中以来等之旧記	後藤家文書
23	江戸後期	外塹	亀の尾記	
24	安政 06 年 (1859)	御惣構・惣構土居・惣構御土居・惣構御堀	安政大火類焼しらべ絵図等	加越能文庫
25	明治 02 年 (1869)	惣構・惣構御土居・御土居	恭敏公日記	尊敬閣文庫